

Title	「一八四八年乃至一八五四年の英国クリスチヤン、ソシアリスト運動に於ける」ジョン・マルコム・フオーブス・ラドロウの生涯、思想及び其の貢献
Sub Title	
Author	野田, 幸一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1929
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.3 (1929. 3) ,p.445(113)- 461(129)
JaLC DOI	10.14991/001.19290301-0113
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19290301-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る規則を制定し勵行すべきことを決議したのである。併し多くの場合に於て此問題は地方組合に放任せられ、全國組合の關與せるは其加入者たる資格として徒弟年限を特定した點のみであり、其年限は二年乃至三年であつた。(Commons, pp. 80-84; Ely, pp. 67-69; Bimba, p. 145; James, pp. 198-208; 271-277)

(昭和四年二月十八日稿)

「一八四八年乃至一八五四年の英國クリスチアン、ソシアリスト運動に於ける」 ジョン・マルコルム・スチアーン、ソシアリスト運動に於ける」

フオーブス・ラドロウの生涯、思想及び其の貢獻

小 序

一八四八年より一八五四年に亘つて英國に於て行はれしクリスチアン、ソシアリスト運動に於て、豫言者、フレデリック、デニソン、モウリス。詩人小説家、チャールス・キングスレイの名は廣く世に知れ渡つて居る。然し乍ら當該運動に忘るべからずして然も等閑視せられし重要な人物があつた。ジョン、マルコルム、フオーブス、ラドロウその人である。

彼等は「クリスチアン、ソシアリズム」(Christian Socialism)を標榜して立つた。然し之は決して嚴格な意味のソシアリズムでなかつた事は、ラドロウ自ら一九〇八年アルバート、ホールに催はされし、汎英會議の席上、聲を大に呼びしところで明かである。曰く「モウリスの信仰にして且又多數の人々を結びつける共通の力となつたる廣義なるソシアリズムと云ふ語は狹義に解せらるべきに非ず」云々。モウリスは自ら「クリスチアン、ソシアリスト」と稱し始めたも、彼も亦依つて立つ主義を「己の如く汝の隣を愛すべし」と云ふキリストの聖句に求め、現在の制度を肯定して、社會改良に要する唯一のものを「産業に於ける新精神」と稱ふ「愛」に見出したものである。彼等の

野 田 幸 一

運動は前に佛のデイド教授の述ぶる如く社會改良運動であつたのである。然り。語義の末に捕はるゝよりも、刻下の社會状態の改善そのものが彼等の急務であつた。

彼等の運動はモウリスを中心にして教育事業に、文筆職に將又協同組合運動へと華々しく進展して行つた。教育事業はモウリスの本願であり、キングスレイは主として筆を揮つて美文を連ねた。ラドロウは筆もさつた、然し協同組合運動に専ら力を注ぎ得る人は同僚の中に彼を措いては無かつた。彼等の協同組合運動はラドロウなくしては運び得ざりし所を斷ずるも決して過言ではないと信ずる。社會改良運動としての當該運動の貢献は協同組合運動に於て殊に大であつた事は確かな事である。所謂様々の力持ちなりしラドロウの功蹟は、世人から餘りに見逃されて居る。以下私は簡単に彼の生涯、思想及び此の運動に盡せる貢献の趾を辿つて見度いと思ふ。

ジョン・マルコルム・フォードス・ラドロウ (John Malcolm Forbes Ludlow) は一八二二年三月八日印度のニマアクに生る、ジョン・ラドロウ大佐の第二子である。父は東印度會社に勤務して居たが、彼の生後間もなく長逝したので母は其の子供達を連れて、當時多數の知人がバリーに居住して居た關係から、居をバリーに移して其處で生活する事となつた。従つて彼は全く佛蘭西で教育を仕込まれ、一八三二年ブルウボン大學に入學し、三七年同校文學部の課程を終了した。彼が在學當時、時の文部大臣ギゾは彼の成績拔群なりしを見て英國大使に「貴國は如何なる目的に此の驚くべき明晰の英國青年を供せんとするか」と尋ねし事屢、なりきと云ふ(註一)。彼の眞面目なる性格、思想は、其の學生時代に於て既に後年の彼を示して居たのである。彼は佛國で教育を受けし關係より佛國民として佛蘭西に居住をせん事を望んだが、父の遺志に従ひ佛國を離れて英國に赴く事になり

た。一八三八年ラドロウは英京ロンドンに渡り、當時世間の注目の的たりし穀物法反對運動に興を起しベレンデン・カー (Belenden Ker) と共に同法の研究に心を傾け、一八四三年十一月二十一日リンコルン法院の集會所へ招かれた。一八四三年より一八七四年に到る間を彼は一運搬夫として實地に働いたのであるが、之より先一八四一年彼はマンチスターに赴き、ジョン、ブライイト、リチャード、コブデン、ムーア、等と交を結びやゝあつて後穀法反對運動者の一員となつた。

彼は其少年時代をバリーに送つた爲に歐洲大陸に於ける民衆運動の事に明るく、同時に又專制政治の弊害をも知悉して居た。一八三〇年の革命の恐怖は年少なりし彼の魂に消すべからざる深き印象を残し、後年彼は目撃せる當時の様子及びバリー、フリップの專制政治の弊害を "Politics for the People" 中に叙べて居る。彼がブルウボン大學に籍を置きし頃、佛國各地に蜂起したる社會運動は又感受性強き青年學徒の心に何物かを植へつけずにはおかなかつた。フウリエは特に彼を惹きつけたと稱する人があるが(註二)然し彼は當時佛蘭西に端を發せる初期社會主義的企劃の何物たるかを知つて居たとレイベン氏は云ふ(註三)然りと雖もモウリスにとりては神聖なりし英國の王政も猶彼にとつては單に「其基礎を全く一家族の利益にあくか、乃至はむしろ一老人の利益の上」に置いて爲された政治に過ぎなかつたのであつた(註四)。斯の如く彼が生粹の英國民と階級觀に於て相違して居た事は止むを得なかつたところであらう、されど此の事實は決して彼にとつてクリスチアン、ソシアリスト運動への精進を不便ならしむるものではなかつた。一八四八年の二月佛國に起れる大革命の報を聞き、ラドロウはバリーに在りし二人の妹の身を案じて急遽同地に赴き、其際民衆の一人とし

て街頭の椅子上に立つて演説をしたと云はる(註五)。一八四八年以後は英國に居を移すに到つたが、其以前迄は彼は、幾度か英國海峽を往來して居た。パリイに在つては彼は、不幸なる者を救済する目的を以て建てられた新教徒組合の「貧民の友俱樂部」(Société des amis des Pouvres)に加はつて居た。

漆黒の毛髪と、黒い瞳を有せる此青年は頭腦頗る明晰であつたが、只身體は矮小な一見頗る押のさかぬ一介の男子であつた。然し乍ら「沈靜な、そして熱心にして強き、又温和な振舞」の人であつたのである(註六)。「讚めらるゝ事も嫌ひ、寫眞を撮らるゝ事さへ好まなかつた程温順」であつたと云はれて居る(註七)。斯の如く人前に入る事を嫌つた彼も自己の有する主義に對しては巍然として屈しないところがあつた。グレイニング氏は云ふ、「爲されねばならぬ事は斷然爲した、然し乍ら彼自身を衆目の前に表はす如き事は決して爲なかつた」と。吾人にして一度クリスチアン、ソシアリスト運動に眼を注がんか、吾々は正しく彼の示したる其の絶倫なる精力に驚嘆するだらう。彼は常に筆を採り、出版をし、試験をし、監督をし、組織をし、立法をするのみならず、又己同様に同僚を物質的に惠與し、一團を愛し導き、彼等の熱心を正しく指導し、モウリスの意志を彼等に傳へ事起れる毎にそれに就て討議し、最後に正しき批判を與へて同僚を心服せしめたのである。然し決して自己に對する信頼や、自分を指導者とする事を避け、只管當該運動の目的の爲めに、目的遂行の爲めに、止むを得ずして之等の役目を爲したのである(註八)。

ラドロウは其生地印度に小さい乍ら恒産を有して居た。而して其處から出る収益が彼の出版費ともなり、後年彼等が設立せる「勞働者大學の講座維持費にも供せられた。彼はこの利益に對し又自身に與へられた精力を感謝して居た。彼の知識は廣汎に亘り、法律、政治、經濟の學に通ずるのみならず、又よく十二ヶ國語を自由に爲し得たと云ふ(註九)。其著作はモウリス並びにキングスレイに影響を與ふるところが多かつた。彼は一つの趣味として廣範圍に亘り社會問題及び經濟問題に關する刊行物、報告書を聚め、秩序正しくそれを整理した。現在之等のものはロンドン大學のゴールドスマイス圖書館に保存せられて居る。

一八四六年、ラドロウは個人として初めてモウリスに直接面會した。其後四八年以來此兩雄は肝膽相照してクリスチアン、ソシアリスト運動に猛進したのであつた。モウリスの豫言者型に對して彼は飽く迄實際運動家であつた。勞働者夜學校に、協同組合運動に、文筆に彼は時を惜まず骨身を碎いて働き續けた。

一八五二年の法律はクリスチアン、ソシアリスト運動を一頓挫せしめた。五四年に到り彼等は團體に解散の止むなきに至つた。ラドロウはウキナムブルドンなるクッチウエイの斜面にペンローズが設計して、北部ロンドン建築工組合の手に依つて建てられた家屋に、ヒューズと共に生活をし、猶社會改良運動に従事したのである(註十)。彼は六十年代に於て多數の著述を爲した。就中一八六七年に著した「勞働階級の進歩」と題するものが有名である。一八六九年マリア、サラ (Maria Sarah) と結婚した。

一八七〇年より七四年に到る間ラドロウは王室委員に充てられ、共濟組合に法的地位、組織並に

一般條件を質問すべく任命された。此の委員會の秘書として彼は大いに働き二百十六頁より成る最後の報告書を作成する爲には血の出る様な努力を以てしたのである。一八七五年夏彼は逝きしタッド・プラット (J. Tadd Pratt) の後を享けて全國労働者の興望を擔ひて共済組合の書記長となり、種々の立法の起草に力を盡した。一八八七年六月三十日功に依りてコムバニオン、オブ、ゼ、バアス (Companion of the Bath) 章を授けらる。一八九一年共済組合書記長の職を退き、一八九二年彼は王室委員會の労働部に招ぜられ、席上自分の青年時代の幻が大部分充されし事を證して居る、曰く「余は労働階級の諸種條件が著るしく變化せりと思ふ。一八四八年の時代に於て成人せる人々すらも了解し得ずして只此の進歩せる點に達せしむるものは異教徒か革命家と想はれし事が今日に於ては小學校を卒業せるばかりの少年少女と雖もよく了解せる事を見る。之實に不思議とさへ思はれる事である」と。後暫くケンシントンに居を定め自由な生活を爲した。然し乍ら猶彼は社會問題と教會の努力に興味を有する事は前と變らなかつた。彼は晩年一九〇八年の汎英會議に出席し、八十八歳の高齡を以て六月二十二日の朝、アルバートホールのAの部——其の論題も基督教と社會主義なる——に出席し、席上唯一のクリスチャン、ソシアリストとして又最後の存命者として立ち上つて抗議した「モウリスの信仰であり、又多數の人々を共に結び共通力となりし廣義のクリスチャン、ソシアリズムと云ふ語は決して狹義に解せらるべきではない。當時に在つては現在の様に偏狹なる目的の爲に聴衆を集める事は豫期しなかつた事であり、クリスチャン、ソシアリズムこそは猶凡ての人々の信仰であると余は固く信ずる」と云つて居る。

一九一一年十月十七日ラドロウは氣管枝炎を患いて逝つた。「余は何等此の世を益したとは思はぬ。然し乍ら全能の神は凡てを知り給ふ。余は誰をも煩はさなかつた様に不平をも云ふまい。余にとつては親愛なるものが二つあつた。一は余の背後に在つて家計を助けて呉れた妻、二は愛する兄弟姉妹である。然し余は前にも云ひし如く、世の爲に何等益する所がなかつた。只神が世の人の爲めに余を召命し其結果余が最も愛好する事にたづさはり得る事を聞きし事は最上の音信であつた。諸君よ、余は神の恩寵を感謝せざりしに非ず、又神の意志に反抗せるに非ず、九十年の物語りを充實せんとせし所に余の目的があるのだらう。神よ希くは下僕をして其目的を見出し全く其に従ふ光榮を與へ給へ」と彼は云ふ。

註一 Greening, in Workingmen's College Journal Vol. XII, p. 242.

註二 Brentano, Die Christlich-Social Bewegung in England, p. 25.

註三 Raven, Christian Socialism in England, p. 58.

註四 Politics, p. 14.

註五 Dictionary of National Biography, Vol. II.

註六 Life and letter of F. J. A. Hort, p. 154.

註七 Times Oct. 19th 1911.

註八 Raven, Christian Socialism in England, p. 59.

註九 Dictionary of National Biography, Vol. II.

註十 Raven, Christian Socialism in England, p. 68.

「彼の政治的信念は民衆に於ける信仰に依據したり」とラドロウ傳記々者が簡述する如く(註一)、クリスチャン、ソシアリストの中に在つて民衆的を標榜して立つ唯一の指導者であつた。彼は「デモクラシー」をば定義して云ふ。デモクラシーは「大衆の利己心を全然放任するには非ずして、國家の巨大なる自利、然も神の眼前に於て聰明と正義とを以て大衆を一個の人間の如くに支配する事を意味するものでなければならぬ。」而して「眞のデモクラシーとは余にとりては社會主義に外ならぬ。」(註二)。蓋し彼も亦モウリスと等しくソシアリズムなる言葉を廣義に解し、嚴密なる意味で用ひなかつたのである。個人は、他人から又は現存する産業界の奴隷状態から解放さるゝのみならず、彼自らの欲望、情熱より自由なる時にのみ「自己支配」を爲し得る。「無知や自負、憤怒、強慾はそれあるよりも無さを以て良とす。」こゝに於て組合は「民衆に對する自己支配の學校」として價値がある事になる。故に彼等が商店や工場に於て忠實に利己心を去つて働く時に初めて政治的自由を獲るに適はしきものとなるのである。然らざる場合に於ては民衆が國家統治權を獲ても何を爲し得るか。何人と雖も直接又は間接に統治權に參與する以上は、國家統制は自分の仕事に非ずと云ひ得る權利は無い」と彼は云ふ。貧民にして可なり、苦汗勞働者にしても猶可なり、只彼等が自己支配を學び、又實行する時に初めて「その時」が近づくのである。「各人をして自治を學ばしめよ、孤獨に非ずして然も他人と友情を厚くし、友情より友情へ、一團より一團へ、少數人の特權を絶えず多數人に擴大し、斯くて英國デモクラシーの集産的自治は達成せらるゝ」。斯くして彼の協同組合運動

に對する思想は發展して行つた。

政治上の解放及び産業上の自由と云ふ問題、並びに個人的改革及び精神的自由の問題は人類に投ぜられたる二つの難解な宿題であつた。ラドロウは之等二個の問題は取扱はるべきものと認識した。其處に彼の特徴が表はれて居る。當時英國ではオーエンと同樣に環境の改善を極力主張せる一派と個人精神の變革及び生活の變革こそ第一のものであると爲した一派とが社會改良論に於て對立して居た。ラドロウは兩者の立場をとつて共に爲さるべき事であると考へた。社會秩序の改善はそれ自體には人間を正しくし又眞に自由に爲す事は出来ない。又個人の精神は人類が此の現在の状態の下に生活する限りに於ては、變化を來らす事は出来ない。彼は過去に於て共產主義者の「既成理想郷」(Communist's readymade Utopia)及び個人主義者の斷片的改心の失敗を見た。さりとては云へ彼は社會平等實現の究極の可能性に對して失望する者ではなかつた。彼はこの二つの目的を效果あらしむる手段として組合の方法を探つた。而して社會秩序及び社會成員と共に改革し、前者の改造は後者の品性の革正と共に併行して行はるべきものなりと爲した。然も此の計畫の進歩に伴ふて、道德的訓練の必要は擴大された。而して彼も亦モウリスと同様に道德の根源を友愛(Fellowship)に求めた。人間がある道德的標準に到達せる時は現在の自由競争の制度を打捨て、任意にして自由なる團體を持つ事を得、隷屬と自利との鏈より解き放たれたる事が出来る。之こそは彼の見たる「約束の地」であり、彼の生涯を捧ぐべき幻であつたのである。

ノルマン、ムーア氏はラドロウの宗教信念に關して述べて曰く、「彼は痛くキリスト教に心を惹か

れた。然も彼の深刻なる宗教的情感は、其言論に於て著書に於て將又其行爲の上によく現はれて居る」と。洵に彼の言の如くクリスチャン、ソシアリスト運動の全體を通じ、又ラドロウの著述の一頁一頁に彼が信仰は躍々として脈打てるを見るのである。ラドロウの神學體系はモウリスに遇ひて著るしき變化を経たりと雖も、其以前、ルーテル、アーノルド等を始め廣汎に亘る讀者によりての研究、又は實際經驗を通して獨特の體系を有して居たのである。

一八三三年の夏に到りて第十九世紀の英國宗教界に於ける事件が始まつた。即ちオックスフォード運動である。ラドロウは此の運動の結果齎されたる敬虔、恭敬の風を盛にし、宗教的情調を高め、禮典を重ずる風を興し、建築、音樂に注意を惹起する等の良き感化を決して否定する者ではなかつた。只彼は此の運動のもたらしたる悪結果、即ち教會をして社會的盲目ならしめし點の弊害を痛感したのである。彼は痛くこの運動を嫌惡し、殊に一八四五年以降運動の首領等が續々ローマ教會に入會するを見て、このカトリックの受認こそは道德的廢類、知識的自殺なりと爲したのである。彼の立場は「自己僞瞞的正統派神學及び聖書崇拜」と呼ぶ所の事から全然離れて、聖書を單に一個の偶像として祭り上げる事なく、キリストに對する生ける證據として觀ずる事であつた(註三)。彼は自らの神學體系構成の上に於て既述の如く其教育を佛蘭西に於て受けしが故に、當時の英國人が一般に捕はれて居た便宜的躊躇から全く自由であつた。即ち彼は英國人が神聖なりと稱ふ總てのものに對して英國式の傳統的範疇より容易に脱れ得たのである。彼は正統派神學の繁雜な體系は有しなかつたが、自己の信仰に就ては極めて單純、自然に表明して居つた。又信仰が決して一個の感情に止まる

ものに非ずして、實行的なるものである限り、それが人間生活に於て最も重要な意義を有するものである事を了解した。斯く彼の宗教生活に於て宗教思想は經驗のつぼを通して單純に歸り、實生活の力と爲り得たのであつた。究極彼にとりては信仰は實生活の力以外のものである必要は無くなつたのである。此の點に於て彼はモウリス、キングスレイ等の思想家と類を異にして居る。レイベン氏は云ふ「彼は所謂完全さ又は高潔さは缺けて居ても、當時の人々が有したる法衣に對する皮相な尊敬と便宜的憐憫から全く解放されて居た」と。然し乍らモウリスに對しては厚き友情と尊敬を拂つて居た。「此の運動の眞の中心」とラドロウが呼びし(註四)一八四八年十二月より毎週月曜日夜八時モウリスの自宅に於て開かれし聖書講義にも、彼は殆ど缺席をしなかつた。而して此の聖書講義に於ても、其目的は全く講義によつて示されし所を生かして役に立たしむる事であつた。會員の多數は自己の意見を卒直に發表しなかつたが、ラドロウはモウリスの感情に順着する事なく卒直に自己の所見を述べたのである。要するに彼は實踐に基督教の凡ての價値を見出したのであつた。

註一 Dictionary of National Biography. Vol. II.

註二 Christian Socialist. Vol. I, p. 49, 50.

註三 Fraser's Magazine XXXIX 中ノ論文 Froude's Nensis of Faith.

註四 Atlantic Monthly. I. XX. p. 112.

最後に私はクリスチャン、ソシアリスト運動に於て爲したるラドロウの努力、貢獻を記さねばな

らない。

一八四八年の春未だ淺き四月十一日の朝、ロンドンの辻から辻、巷から巷人だかりのする要所々に洩れなく激文が貼り出されて心ある人、心なき人、全市民の注意を惹き集めた其の日から、ラドロウの努力は記されねばならぬ。此の日こそはクリスチャン、ソシアリスト運動の幕が切つて落された日である。モウリスの客間で彼は同労の友キングスレイと初會見をした。翌日彼等は大部分をラドロウの意見を土臺として新天地へ第一歩踏み出したのである。

一八四八年にはキングスレイの筆になりし「英國の勞働者」と題する一文と共に、ラドロウのものせる「英國の紳士」と題する最初一枚刷が出来た。而してこの運動も最初の一年が過ぎて愈々本舞臺へ入つて行つた。政策の樹立の必要と共に、實際家ラドロウの才能、手腕に待つべき時が來たのだ。彼は友人セルフ氏の紹介に依り當時チャイニーズト運動の大立物たりし、クーパー氏と相識る事を得た(註一)。而して一八四九年四月に到り之等の士を迎へて社會問題討議が開かれる事になつた。其後青年ロイド・ジョーンズをも迎へてこの討議會は愈々興深きものとなつた。

同年末ラドロウはバライに暫く滞在せる間にルイ、ブランの計劃なる「國民工場」(Atelier National)が政府によつて採用され然もその事は政府當局は反對なるに拘はらず、ビュウエルに始めて打建てられた「勞働者組合」が多數の一致協力に依つて遂行せられし事なるを見た。彼の注意が惹かれたのは此の「組合」にして、苦心慘憺材料の聚集に努力し、ロンドンに歸來、翌一八五〇年の「クリスチャン、ソシアリズム叢書」の中にこの事を記述し、具體的に「勞働組合」(Working Association)なるものを發表した。理論は既に過ぎ彼の希望は其實行であつた。只時も時、折も折、一八四九年の眞夏のコレラ流行は彼の出鼻を挫いてしまつた。然し乍ら其終熄後ラドロウはクーバー氏の説いた「出來合制度」(Stop System)を参考として「協同組合」(Co-operative Association)の實際組織に着手せんとしたのである。然るに一方コレラ病の恐怖を目のあたり經驗したるマンスフィールドは「保健聯盟」の必要を説き、ラドロウの計畫より急を要する事を主張し、ラドロウは遂に自己の計畫を一時思ひ止まらざるを得なかつたが、ラドロウ自らもマンスフィールドの計畫に賛し彼と力を併せて實際の衝に當つた。

一八五〇年の一月八日、モウリスの家に於てラドロウの提案なる「裁縫工組合」の具體案が數名の職人と二人の裁縫店主と共に討議せられた。其結果此計畫は急に進捗して、キャスル街三十四番地にラドロウの計畫になる商店及び仕事場が出来た。而して一月十八日ラドロウが三年間の希望は成就の緒についたのであつた。二月五日には十二人が参加し、二月十一日より仕事が始められた。其後二ヶ月にして参加者は倍加した。組合成立當時の事情に就てはヒューズが「クリスチャン、ソシアリズム叢書」の中に詳細に述べて居る。裁縫工組合設立當時に於ては左程面倒な事も起らなかつたが、其後組合数を増し、組合員の増加するにつれて彼等は一定組織なき事に由つて種々な困難に遭遇せざるを得なかつた。そこで彼等はバライに在つて、實際職務の經驗ありしラドロウの友人、チャールズ、サライを有給の書記として依頼する事にした(註三)。只不幸にして此事務家はクリスチャンではなかつた。従つて組合員と書記の間に生じたる不了解が、サライをしてラドロウに書を送

り辭職を乞はしむるに到つた。サリイ去つて後彼等はラドロウを中心にして研究を重ね、六月號「ト
ラクト」には (イ)クリスチャン、ソシアリスト協會の組織、(ロ)組合聯合の規約、(ハ)組合の規
約草案等が載せられて居る。而して毎月第一第二の水曜日には組合組織の事に就き會合して協議す
る所があつた。斯くて其結果次第に組織體としての形容を整へ、各組合内部に於ける組織も各組合
相互の連絡と同様に秩序立つて來たのである。其後組合費の負擔配分、爭議仲裁の方法も考へられ
た(註四)。

猶既述裁縫工組合の創設以來、彼等は製靴工、建築工、印刷工、製菓工、裁縫婦、ピアノ製造工、
婦人ギルド等の組合を組織して皆相當の効果をあげて居る(註五)。而して是等の設立に於てラドロウ
の力は預つて大であつたのである。

斯の如き組合運動は一見クリスチャン、ソシアリスト運動と關係なき余業の如く見ゆれども、彼
等は其「第一報告書」中に記して居る。「之等のものは大河に注ぐ一支流に過ぎぬ。然し乍ら過去三
年に於て世間の人は、一様に此の當時は社會主義と思はれて居たる協同事業が、斯く著るしく擴が
つた事に驚かない者は無かつた。」(註六) 思へば裁縫工組合の設立されて以來、各種組合の設立はク
ーバアの云へる如く雨後の筍にも似たものがあつた。只其の成否は問はずとも彼等が、個人主義に
永年培はれし英國人、殊に隣人を知らざるを以て誇りとせるロンドン市民に、協同思想を普及せし
めたる事は大なる功績と云はねばならない。

其後彼等の組合運動はラドロウの友人ニールを迎へて益々發達した。然し一八五二年發布されし
「産業及び保護組合法」が彼等の運動を一頓挫せしめたことは別の所に於て既に記した如くである。

然し乍ら、ラドロウ。ニール。ヒーズ。クーバア等の士は、自ら奔走して一八五〇年より、スラニ
イ氏を委員長と爲したる此の法律の調査委員會に努力して聚集せる材料の供給が、自らの墓穴を掘
るに終らんとは思ひ及ばざる所であつたらう。スラニイ氏は辣腕家として名ありし人である。此の
人を委員長と爲せる委員會の爲に奔走して、自ら兩頭推論に陥らざるを得なかつた人々こそ、悲し
き淨愚の人であつたらう。實際家ラドロウが僅に案出せる切抜策たる「速進組合」との改名も無理
押の一策に過ぎなかつた。究極彼等は教育事業に立歸るを得策としたのである。「労働者大學」(Work-
ing Men's College)は斯くして彼等の最後の歸着點となつた。「先づ何事よりも魂の改造」はモウ
リスの初より述へし所である。ラドロウは「組合法」の講座を引受けた。モウリス、ヒューズ、フ
ーニバル、ウオルシュ等の面々もそれ／＼講座を持つ事となつた。クリスチャン、ソシアリスト運
動が、宗教的社會改良運動なる限り、時の長短の差こそあれ、この到達點は必然のものである。イ
エスキリストは個々の魂に「先づ神の國と其の義を求めよ」と囁いた。今や彼等に示されたものは
宗教運動の本質的な結論であつた。労働者各自がラドロウに成り、モウリスに成り、キングスレイ
の魂を有する事が先決問題であつたのだ。

筆を擱く前私は彼の文筆に依る活動を簡述して見やう。一八五〇年ラドロウは Fraser's Magazine
一月號に「労働と貧民」と題する論文を掲げ、法律、社會問題、産業等に亘つて論じた。同年二月
より九ヶ月の間にモウリスの「Somebody and Nobody」との對話」と題する冊子を第一巻として發行

せられし七卷の冊子に於て、ラドロウは第四卷“*The Working Association of Paris*”及び第六卷“*Prevailing idolatres of hints for Political Economist*”に筆を採り、第五卷“*The Society for Promoting Working-Men's Association*”はサットイと共著した。一八五一年には“*Christian Socialist and its Opponents*”の論文を表はし五二年には“*The Master engineer and their workmen*”と著して居る。

猶「クリスチャン、ソシアリスト」と稱する叢書の第一卷はキングスレイ病弱なりし爲め専らラドロウ其の編輯に當つた。一八五〇年八月世に表はれしキングスレイの名著「アルトン、ロック」もラドロウの助言ありしと云ふ。キングスレイは此の書を公にするに先立ちラドロウに其批評を求めた。而してラドロウの讃辭に感激して彼は返事を書き送つた(註七)。

運動終了後の主なる著作は下の如くである。

- Thoughts on the Policy of the Crown toward India, 1859.
- A Sketch of the History of the United States, 1862.
- Woman's Work in the Church, 1865.
- Popular Epics of the Middle Ages, 2 Vols, 1865.
- President Lincoln self-portrayed, 1866.
- A Quarter Century of Jamaica Legislation, 1866.
- Progress of Working Class, 1867.
- The War of American Independence, 1876.
- 註一 Gannage, *History of Chartist Movement*, p. 354.
- 註二 Valleroux, *Associations co-opératives en France et à l'étranger*, p. 2-30.
- 註三 *Economic Review*, IV. p. 36, 37.
- 註四 Raven, *Christian Socialism in England*, p. 192.
- 註五 “ ” p. 194-215.
- 註六 *First Report*, p. 34.
- 註七 *Life of Kingsley*, I. p. 233.